

【特集】

明治大学に着任して

関 根 宏 朗

明治大学教職課程について

このたび光栄にも歴史と伝統ある明治大学の教員の末席に名を連ねることとなった。赴任して9ヶ月がたつが、すばらしい同僚たち、すばらしい事務スタッフの皆さんとともに仕事をさせていただきつつ日々大きな喜びを感じている。

本学教職課程の雰囲気はとてもあたたかく、みながお互いのことを本当に尊重しあっていて、会議や打ち合わせ等の運営や進行においても民主的な討議がどこまでも大切にされているのが何より印象的だった（赴任してまず驚いたのは、すべての先生方がフラットに「〇〇さん」と呼び合っていたことである）。前任校では教職課程を直接担当していたのは実質的に自分ひとりだったのだが、規模の大きな明治ではむしろチームでさまざまな校務にあたることが多く、その意味でも上記のリベラルな空気感は何も知らない赴任一年目の身には本当にありがたかった。分野の第一線で活躍されている先生方からふとした折に「何かこまっていることはないか」と優しく受容的なお声かけを頂戴するたび、大きく勇気付けられた。またとくに比較的年齢に近い先生方とは公私で席を同じくすることが多く、基本的な事項の教唆も含めて本当に助けていただいた。この大きな恩はいずれ未来の同僚となる方々へとしっかりお返ししたい。

思えば昨春35歳で明治大学に転任させていただいたが、明治の定年は70歳ということで、何事もなければこれまでの人生とまったく同じだけの長さをお世話になるということで、自らの節目としてもここに特別な縁を感じている。この明治大学において、しっかりと腰をすえて研究、校務、そして教育に、一所懸命頑張っていきたいと強く思う。

学生について

この一年3つのキャンパスで授業をさせていただいて、それぞれのキャンパスごとに若干の雰囲気の違いがあるとはいえ、しかし明治大学の学生たちはみな共通して基本的に真面目でしっかりした学生が多いという印象を受けた。今風の言葉で言うならば「コミュニケーション力」に長けている学生が相対的に多く、食欲に学生生活を楽しもうとする姿勢を頼もしく感じている。欲を言えば授業後に質問に来てくれる学生がもう少し増えてくれればとも思うが、ともあ

れ来てくれるだけありがたい。また実習クラスの学生たちとはあたかもゼミ指導のような距離感で付き合うことができ、この点もとても嬉しく、やりがいを感じたところだった。

東京という街について

前任の岩手県立大学勤務を経て、学部・修士・博士と10年以上過ごしてきた東京に約5年ぶりに戻ることとなったわけだが、久しぶりの東京は学生時代に過ごしたときとはまるで違って見えた。街自体が大きく変わったというわけではないだろうが、しかし東北ののんびりした空気に慣れすぎてしまったためか、4月当初はそのスピード感（たとえば通行人の歩行速度や電車接続のテンポの良さ）にしばし戸惑ってしまうこともあった。とりわけ朝夕の満員電車の苛烈さには閉口した。学生時代にはいわば当たり前の日常として受け入れてしまっていたが、やはりあの殺人的な輸送システムはどこか人間を蔑ろにしているというか、少しおかしいと思う。

ところで、この一年はとにかく東京の街（とくに職場周辺）をたくさん歩いた。直接的には運動不足解消という目的のため、中野や明大前で授業があった日は基本的に新宿駅まで歩き、調子がいいときには池袋や渋谷まで足を伸ばすことにしていたが、それ以外にも思いついては途中下車してあちらこちらを漫ろ歩いた。途中、休憩がてら入った飲み屋で痛飲したりして結局はかえって健康のためには良くなかったかもしれないが、しかしこうした逍遥はいま自分がたしかに東京にいるんだという確かなリアリティを回復するために重要な作業であったように思う（そして今もそうである）。茨城の田舎出身の自分が、高校から埼玉に、そして大学・大学院では東京へと、少しずつ自らのアイデンティティ構築の過程に重ね送るかたちでいわば時代遅れの「上京物語」を経験してきたということを省みるに、やはりここ東京には特別な想いが拭えない。この街でふたたび学びまた生活できることをとても幸せに思う。

現在の課題

いま反省とともに早期に解決すべき課題として感じているのは、この一年まったく進まなかった研究室の整備についてである。たまたま駿河台で開講されている授業を受け持っていないこともあってか、自分の研究室よりもむしろ中野や和泉の講師控え室の方が馴染みがある有様で、本当にもったいないことに駿河台にいただいている部屋は文字通りの「荷物置き場」と化してしまっている。これではいけないとは思いながら、いつのまにか9ヶ月も過ぎてしまった。せめてこの春休み中には何とかしたいと思う。

もうひとつ、せっかくの恵まれた環境を活かしながら研究活動をもっと活発化させていくということも今後の大きな課題である。個人研究を深化させることはもとより、大学院時代の先輩や同輩、そしてまだたくさん東京に残っている後輩たちとより頻繁に研究会を開いたり、明治大学の自由な空気のなかで学内外に協働的な研究の可能性を模索しつつ、少しずつでも自らの学んだ成果を学生たちの教育や同僚たちとの対話の場へと還元していきたい。